

新・瘠我慢の説

経済学者
渡辺利夫

第十九回 西郷菊次郎のこと

日清戦争での敗北により清国が日本に割譲した島が台湾である。後れて列強の一員たらんとする日本がこの海外領土をいかに統治するか。欧米列強の関心事でもあった。英紙『タイムズ』の二万字に及ぶ長大な論説記事がある。同記事は明治三十七年（一九〇四）九月二十四日付である。まったく同一のもので翌二十五日の『ニューヨーク・タイムズ』にも掲載された。

長い論説のヘッドラインが、日本の台湾統治のありようを記者がいかに高く評価していたかをうかがわせる。「日本人によって劇的な変化を遂げた台

湾という島―誰もが成し得なかつたことを数年で達成した驚くべき成果―他の植民地国家に対する一つの教訓」とある。実際、第二次大戦での敗北により台湾放棄を余儀なくされるまでの半世紀の間に、日本は台湾の近代化をほぼ完成の域にいたらしめた。経済開発、政治社会の安定性のいずれの観点からみても、日本の台湾統治は他の列強の植民地経営に比べてはるかに高く評価されるべき実績を残した。

台湾の近代化は、第四代総督として児玉源太郎、民政局長（のちに民政長官）として後藤新平

が着任した明治三十一年（一八九八）以降のことであった。解決を迫られていた緊急の課題が「土匪」と呼ばれる反日武装集団の鎮圧であった。土匪の主力は清国から呼び寄せられた「兵勇」であり、台湾住民によって組織された「民軍」と合わせて約五万人が守備軍となった。

日本軍との攻防戦に敗れた清国兵勇はたちまちにして戦意喪失、台北城に流れ込んで強奪、強姦、放火、何でもありの狼藉を働いたのちに清国に逃亡した。しかし、その後の日本軍を徹底的に苦しめたのは銃器不十分な民軍であった。民軍は背後を衝くゲリラ戦を展開、この戦法に慣れない日本軍を大いに悩ませ、時に苛立つ日本兵は町村民を含む住民を過剰に殺戮、これが住民の怨嗟を招いて凄惨な修羅場がいくつも生まれた。

後藤新平の出番であった。軍隊や警察の力をもつての鎮圧は不可能だと後藤はみた。力に頼るのではなく行政の末端は自治制度に任せ、自治的行政を最善に機能させるよう警察制度を利用し、そう

することによって土匪の生存空間を消滅させようというのが後藤の考え方であった。後藤は台湾に古くからつづく「保甲」制度と呼ばれる「旧慣」に深い関心を寄せていた。

十戸を一甲、十甲を一保とする自治自衛の共同体である。台湾は清国にとっては「化外の地」であり、統治の対象と考えられてはいなかった。放任のままでもあった。それがゆえにこの旧慣は台湾のどこにおいても実によく発達していると後藤はみた。後藤はこれを利用しない手はないと考えたのである。

台湾のなかでも土匪が最も繁く跋扈していたのが北東部の宜蘭であり、庁長として西郷菊次郎が赴任してきたのがこの地であった。菊次郎は父の隆盛が奄美に遠島されていた時の長男として出生、のちに薩摩の西郷家に引き取られ、明治政府に入る隆盛に伴われて上京した。十二歳の時に米國留学、帰国後に勃発した西南戦争に薩軍の兵士として参じ、銃弾を右足に受け膝下を切断。外務省での勤務のうちに、叔父の海軍大臣・西郷従道の命

により台湾総督府に赴任、勤務地が宜蘭となった。

八方手を尽くしてなお解決の糸口さえみつからず、日本の討伐軍に対する土匪の仇怨はいやますばかりであった。いずれ大規模な暴発は避けられない。菊次郎は総督府に出向いて後藤新平に訴える。

「武力鎮圧ではどうにも勝ち目はありません。招降策以外に手はないんじゃないでしょうか。政治的な不満分子もおります。生来の悪党もいます。しかし、彼らは少数派です。生業を得られず土匪に身を投じた者がほとんどじゃないでしょうか。武力は最小限に用い、匪徒に生業を保証してやる。前非を咎めることなく、総督府のほうから招降の意を示す。これが順序じゃないかと思うのですが」

後藤は本質をよくつかんだ菊次郎の説に深く同意し、二人して児玉を口説く。武力鎮圧の詮無きことをすでに悟っていた軍政家の児玉は菊次郎の

案を受け入れ、ただちに招降策へと転じた。

菊次郎の茫たる風貌から立ち上る何か大きな器量に、大頭目の林火旺も信をおいたのであろう。

招降策を受け入れた。菊次郎は踵を返して総督府に向かい、今度は総督が土匪に向かって招降策への決然たる意志を表明すべきだと説き、児玉はそれに応じた。児玉の意を察した後藤は、大きな帰順宣誓式典を挙行しようと考え、林火旺の拠点である宜蘭東北部山中の礁溪の一公園でこれを執り行った。

式典を終え宜蘭を去るに際して後藤が認めた七言絶句「入宜蘭城」が鶴見祐輔『正伝 後藤新平』（藤原書店）に収められている。鶴見の読み下しで記す。

悲風慘雨一時晴れ

これより万民太平を楽しまん

初めて識る聖恩の天と一なるを

歛声湧き起こる宜蘭城

宜蘭には西郷堤防としてその事績をいまに伝え

る長大な構造物がある。頻発する宜蘭川の氾濫に
なすすべのなかつた住民の救済のために、菊次郎み
ずからが計画、工事監督を務めて造られた堤防で
ある。築堤は帰順した土匪の動員によつてなされ
た。川の畔には高さ四メートルの石碑「西郷庁憲
徳政碑」が建てられ、菊次郎の民衆教化の実績が七
百五十字の美しい楷書で彫り込まれている。

菊次郎は帰国後の明治三十七年（一九〇四）に
京都市長となり、七年間の在任中に第二疎水開削
事業、上下水道整備、輸送力強化のための道路拡
築事業に乗り出し、京都発展の基盤整備に努め
た。

菊次郎の次男に西郷隆秀という人物がいる。昭
和六年（一九三二）に拓殖大学を卒業、昭和三十
年から昭和三十九年まで同大学の理事長を三期に
わたつて務めた。「春秋に富み、学内においても信
頼厚く、且つ学外一般に対して顔も広く、将来本
学の発展に尽力して頂くのに最適の人物」と推薦の
辞にはある。往時の総長は政治学者として著名な

矢部貞治であり、二人のトップのもとで学園復興
が進められた。六〇年安保など左翼リベラリズム
の横溢していたあの時期に拓殖大学を左翼偏重の
時代潮流から守り抜いた真の指導者が隆秀であつ
た。八王子国際キャンパスには「西郷隆秀先生顕彰
碑」が建てられている。

隆秀の兄が長男の西郷隆治である。隆治もまた
拓殖大学に入学したが、菊次郎の命により農事研
究のためにブラジルに渡り、さらにサンパウロを基
点に日本人移住者子弟の武道教育にも貢献した。
西郷隆盛の面影を最もよくとどめる人物だといわ
れ、城山の麓に堂々と建つ西郷隆盛の銅像のモデル
は隆治だと海音寺潮五郎はいう（『西郷隆盛』朝日
新聞社）。拓殖大学に奉職し縁を通じて何か大い
なるものにつながっているという幸福感を私は抱く。

わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済
学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長・総長を歴任。八五
年、『成長のアジア 停滞のアジア』で吉野作造賞受賞。八七年、『開発経済学』
で大平正芳記念賞受賞。九〇年、『西太平洋の時代』でアジア・太平洋賞受賞
賞。九六年、『神経症の時代』で開高健賞受賞。二〇一二年、正論大賞。